

6 近代観測より前に発生した大規模崩壊事例に関する考察

近代観測より前に発生した大規模崩壊事例については、観測資料がないことから定量的な分析は不可能であり、前章までと同列には扱えない。しかしながら、残されている歴史記録を活用して分析することで、定性的ではあるものの、気候特性の考察を試みる。17 事例を歴史記録から検討すると、図 6.1 の通りに分類される¹²⁾。11 事例(65%)が長期間で見た温暖期に発生している。6 事例(35%)は長期間で見た寒冷期に発生している。また、寒冷期の 6 事例について、3 事例がやや寒冷さが緩和された小康状態の期間に発生しており、別の 3 事例は寒冷期間内の長雨記録がある年に発生していた。寒冷期間内の長雨記録がある年に発生した 3 事例は、いずれも古墳寒冷期(AD246 年～732 年)以降の事例であると共に、途中、小氷期(AD1296 年～19 世紀初頭)の期間を含んでいた^{13), 14)}。温暖期の発生事例比率が大きいこと、また、寒冷期ではあっても緩和期に、あるいは長雨の年に発生していたことは、近代観測開始以降の事例分析と調和的である。

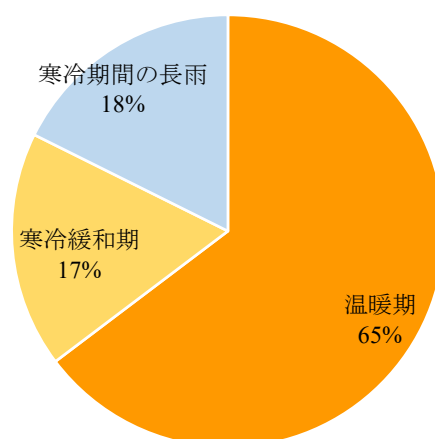


図6.1 大規模崩壊発生時の気候分類(近代観測より前)

*全17事例、内寒冷期には宝暦地震後の増破(3箇所)、温暖期には明治十津川水害(2事例、奈良・和歌山県合計30箇所)を含む。